

「通信配達の時のこと」

向井大輔さんはポストにつうしんを入れた後に大きな声で「こんにちは一ひとはですー」と言いました。すると中から女性が出てこれ「まあひとはさんねーいつも読ませてもらってるんよ〜毎月大変だろうなあと感謝してるんですよ」と。向井さんのおかげで女性の思いを知ることができました。

また違うお家では毎回向井さんとお話しするのを楽しみにしてくださっている方がおられます。前任の田中秀典さんからの「少しの時間車の中で待ちちゃってーせ」という思いを引き継いで他のきららと一緒に10分くらい二人のやりとりを見守るという、とても温かい時間が流れています。(ひとは工房 二宮由香里)

「ひとはまっりのーコマ」

スタッフの佐々木さんに声をかけてきた谷本佳穂さん。楽しそうにステージを見ながらお話をされていた時の出来事です。立ってステージを見ていた谷本さんに席を譲った佐々木さん。ところがすぐにどうぞ返しをされたのです。近くで見ていた私は「おなかの大きな佐々木さんを気遣って譲ったのだな」と思いました。谷本さんの自然体でされたその行動に感動...とても素敵なお一日になりました。

(ひとは作業所 関内宣子)

「地域の方と」

重村さん宅にて、ひとはまっりでのお礼を伝えると「吉田口のあ、こはなんて言うんかいね?」「あ、ぶ、ぶ、ぶ」と答えると「そうよ、そうよ!」と重村さん。「わし、出店のヨーヨーにおったろ。そんたら、岡田君がすぐに横にピタッとくっついてずと話しよ、たんよ。ダンスしよう言われて一緒にステージにあが、たんで。岡田君、元気にしと、たわ。昔、やきそばも作、たよ。久しぶりに会えてよかったよ」と教えてくださいました。

溝上さんは「初めてクレープ食べた。おいしかったよ。また来年も行くけー頑張らんとね」と。

迫井さんは出店のチケット販売をお手伝いしてくださり、何を言わなくとも「正」の字を書いて販売を。まつりが終わる時には売り上げが分かっており、残ったチケットと数も売り上げもひらたり!今回の通信配達には、話が弾みに弾みました!(ひとは工房 増野奈緒)

「ひとは40周年を前に」

「人間ホールの思い出」

『人間ホール』は1989年から始まりました。その名称は、高齢者・障害者・健常者という、人という意味の者の前にある高齢・障害・健常という冠を取り払い、同じ人間として共に楽しめるものにしたという願いを込めて決められました。そのために地域の人を中心にその年々の流行を取り入れながらいろんな企画を毎回準備して参加者を楽しませてくれました。

第1回の企画は『ザ・わたしたち』のコンサートでした。ヒューマンソングを歌うことを主目的に活動する彼女らは企画意図を体現してくれ、以降人間ホールの開催に欠かせない存在となりました。

また当時大流行していたディスコを向原に作ろうと催された第2回の企画は、その後語り草となりました。私自身は参加していませんが、当時大変盛り上がったことは想像に難くありません。古参のスタッフから「あの時は...」と聞かされたものです。そんな思いからディスコの企画は再び復活し、第20回(2008年)には私自身も参加し、すごく感動したのを覚えています。

そんな人間ホールも第29回(2017年)を『ザ・わたしたち』のコンサートで締めくくり29年にわたる歴史に幕を閉じました。

しかしこれで全てが終わったとは思いません。人間ホールで培われた思いは今もひとはに息づいています。7方の共同ホームには彼女たちの歌声が響いていて、その思いを知ることができるとでしょう。(原田圭介)

編集後記

4月号から「ひとは40周年を前に」のコーナーを始め、40年を迎える中で、今までにやっていたイベントや活動を中継し、ひとはに長く続けられていくスタッフや系家のあき方、原稿依頼をしていこう。その中で「ブティック」をしたことがあという話を聞いた。閉店したブティックの残りの服も売られており、夕方から閉店し、仕事帰りの人の行列ができていた。ひとはにまつわる話をさらに触れたいから聞いている。(竹内宏美)